

社会教育施設の自己紹介

【館名】

兵庫県立美術館—芸術の館—

【施設概要】

兵庫県立美術館は、平成14年（2002年）4月に「震災からの文化の復興のシンボル」として神戸東部新都心（HAT神戸）に開館した美術館で、地域に根ざした美術館を目指しています。世界的に著名な建築家安藤忠雄氏によって設計された建物は、延床面積、27,461㎡という日本最大級の規模であり、北には六甲山系を、南には瀬戸内海と神戸港の風景を臨む美しい環境に位置しています。震災の教訓から、来館者と作品を守るために地下に免震装置が設置され、仮に再び阪神・淡路大震災クラスの地震が起こったとしても満水のコップの水が揺れる程度の構造になっています。



【美術館外観 海側からのぞむ】

前身の兵庫県立近代美術館から収集してきた約7000点の作品を所蔵し、年間3回の展示替えをおこない、毎回約200点をテーマ設定し展示しています。近代彫刻や版画のコレクションのほか、金山平三や小磯良平といった神戸が生んだ洋画家の作品が展示の柱です。

特別展では、海外の美術館から作品を借用しての大型の企画展示のほか、美術館の自主企画の現代美術展示などを行っています。ほかにもコンサート、映画、ファッション、古典芸能などのイベントを開催したり、インターネットや書籍閲覧が可能な美術情報センター、レストランやカフェも備えており、ゆったりとした時間を過ごすことができます。また、一般の方が展覧会などの発表の場として利用できる天井高さ7.2m、床面積約800㎡のギャラリーも備えています。

兵庫県立美術館ホームページアドレス：<http://www.artm.pref.hyogo.jp>

【特色ある取組等】

①視覚に障害がある人にも美術館に足を運んでいただきたいという思いから、彫刻をはじめとする立体的な作品に、手で触れて鑑賞していただくことのできる「美術の中のかたち」と名づけた企画展を毎年開催しています。



【「美術の中のかたち」展覧会場風景
ブロンズ彫刻に触れて鑑賞する】



【「ドレスデン国立美術館展—世界の鏡」
関連こどものイベント作品
フェルメールの絵をみて、その世界を再現】

②子どもたちが美術館を身近に感じ、親しみを持てるように、学校の団体鑑賞を積極的に受け入れ、小学校の団体鑑賞では、ミュージアム・ティーチャーが当館所蔵の近・現代美術作品を用いてギャラリー・トーク（対話型鑑賞）を実施するとともに、毎月1回「こどものイベント」と題し、県内の小中学生を対象に、展覧会鑑賞と、それにちなんだ美術制作を組み合わせたワークショップ・プログラムを開催しています。

また、兵庫県には数多くの美術館があることから、美術館が相互に連携をとり情報を交換し、ひとつの美術館ではなしえない高いレベルの文化的な発信を目指すプロジェクト『ひょうご美術館連携事業』を実施し、毎年合同展覧会を県内各地で開催しています。

【その他】

一方、修復室や絵画用X線装置、蛍光X線分析装置などの施設を整えて保存修復専門の職員2名を配置し、館蔵作品の保存、修復の活動をおこなうとともに、災害時の資料救済の方法など外部からの問い合わせに積極的に対応しています。

様々な芸術活動の一環として、ネットミュージアム兵庫文学館というインターネット上の文学館の運営もおこなっています。インターネットができる環境にあれば、場所と時間を選ばず、クリック一つで入館できます。美術館の美術情報センターでも、5台の端末から入館できます。この文学館には、兵庫出身や在住など、ゆかりの作家のデータベース「常設展示」と、個々の作家などにスポットをあてた柳田国男館、平家物語館、陳舜臣館等の「企画展示」、そして、ゆかりの阿久悠さんや宮本輝さんなどの作家が自身の作品を映像で語る「講堂」、県内の文学碑を紹介する「文学碑マップ」などがあります。

アドレス：<http://www.bungaku.pref.hyogo.jp>



【ネットミュージアム兵庫文学館のホームページ画面】

【来館者の推移】

平成14年度	1,038,552人	平成15年度	794,778人
平成16年度	635,677人	平成17年度	669,773人
平成18年度	434,003人		

【今後の企画展の紹介】

○開館5周年記念 ムンク展

平成20年1月19日（土）～3月30日（日）

ノルウェーを代表する芸術家エドヴァルド・ムンク(1863-1944)は、近代人の孤独や頹廃を描いた象徴主義的作品によってわが国でも広く親しまれています。今回の展覧会では、「吸血鬼」、「不安」、「声／夏の夜」といった代表作に加え、これまで紹介される機会があまりなかった建築物の装飾プランなど、108点の作品をご覧いただけます。装飾との関連でムンク芸術を読み解く本展は、彼が自作をどのように見せようとしていたのかを視野に入れて作品を展示する初めての試みとなるでしょう。



《不安》1894年 オスロ市立ムンク美術館
©Munch Museum, Oslo

○村上華岳・水越松南生誕120年記念

南画って何だ！？近代の南画—日本のころと美

4月22日（火）～6月8日（日）

兵庫県ゆかりの画家、^{むらかみ かがく みずこしろうなん}村上華岳と水越松南の生誕120年を記念して開催する展覧会です。中国を起源とし、18世紀の日本で成立した南画。そのあゆみと展開を、^{いけたいが よ きぶそん とみおかてつさい}池大雅、与謝蕪村から富岡鉄斎、^{はしもとかんせつ よろづてつごろう うめはらりゅうざぶろう}橋本関雪そして萬鉄五郎や梅原龍三郎まで、約70作家、190点の作品でたどります。展覧会を通じて、江戸中期から昭和前期までの南画の中に脈々と受け継がれてきた日本のころと美を感じとっていただけるでしょう。

（会期中展示替えを行います。前期：4月22日（火）～5月18日（日）、後期：5月19日（火）～6月8日（日））

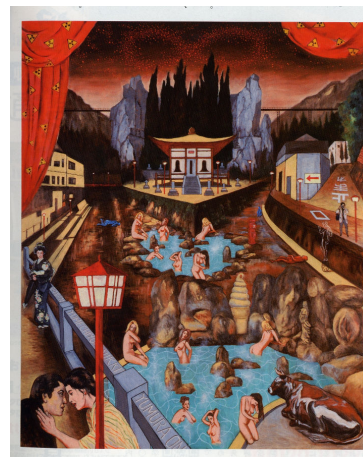


今村紫紅《细雨》横浜美術館蔵

○冒険王・横尾忠則

平成20年6月27日（金）～8月24日（日）

この展覧会は、現代日本を代表するアーティスト横尾忠則(1936-兵庫県西脇市生まれ)の芸術を、「冒険」という切り口で紹介するものです。「冒険」の展示は二つの作品群から構成されます。ひとつは、ターザンや少年探偵団といった、血湧き肉躍る冒険物語をテーマにした作品、もうひとつは、表現上、冒険精神にあふれ、創造性の高い作品です。この形式と内容、両方の視点から選んだ絵画、グラフィック・デザイン、資料など、近作を中心とする約百数十点は、横尾芸術の多彩な魅力に触れる機会となることでしょう。



夢千代日記